

令和元年度 学生による授業評価結果報告

令和元年度の学芸員資格課程の全授業について、例年のように授業評価を行いました。質問項目別の数値による評価と、自由記述による二つの柱からなる授業評価は、個々の授業の得失を明らかにし、問題点のある授業内容を改善とするとともに、高く評価された項目について、さらなるレベルアップを図るための施策であることは言うまでもありません。同時に、現在の授業に関する学生たちの生の意識を探り、学生諸君が授業にどのようなものを求めているかを浮き彫りにすることも含まれているはずです。大学の教育は、シラバスに反映されているように、一定の具体的な内容と到達目標が定められているものです。しかし、教育というものは、教育する側から学生へという一方通行ではなく、学生たちが教育をどのように受け止めるかという、もう一つの方向についても考察することも、絶対に必要であると考えられます。

したがって、各項目についての単年度の数値の確認と反省、二年ないしは三年という、一定期間内による数値の変動と実際に行われた授業改善の実態の比較検討、という二つの点に注目することは当然であるとしても、それだけではなく、専修大学で学芸員課程を履修する学生のカラーとでもいうべきものを、より長期にわたって明らかにすることも見落とすことのできない点と考えられます。「学習内容のレベルは適切でしたか」という質問項目について、適切・やや難しい・難しい、という回答の合計は、平成二十九年度前期は73.45%でしたが、平成三十年度は63.68%、そして本年度は98.15%と大幅に数値が上昇しています。なかでも、適切が90.28%という数値となっています。全体の評価による結果であることから、どの授業がこの高評価に寄与したかは明らかではないものの、全体として、履修学生が感じている授業の充実度が改善されていることは疑いないでしょう。

しかし問題は、「宿題・課題、予習・復習にかけて勉強量はどのくらいでしたか（1回の授業あたりの平均として）」という、履修学生の授業に臨む意識を探る項目についてが、三年連続して30%台後半という数値に低迷している点でしょう。先にも指摘したように、授業は、それを行う教員の取り揃える内容、授業方法、取り組みの熱意、さらに教え方の巧拙などにより、その優劣が大きく左右されます。しかし、それと同時に、履修学生たちの授業の取り組み方によって、そこから生ずる結果は全く違ったものになる可能性があります。これは、実習などの小人数教育はもちろん、大教室における講義形式の授業にも当てはまることでしょう。この点を踏まえて、学芸員課程の各担当教員には、さらなる授業改善に取り組まれることをお願いするとともに、学生一人一人の「やる気」を喚起するように工夫や課題、その講評などにも意を注いでいただきたいと思います。

以上